

所在地：〒840-0054 佐賀市水ヶ江 1-4-45

電話番号：0952-24-2745

記載日：平成 28 年 5 月 20 日 記載者：庄籠道子 記載者役職：副園長

貴校の校風、おおまかな特色について：

子どもたちは、人から言われて動くのではなく、自分から遊びを見つけて遊び、遊びの中で試行錯誤・葛藤・トラブルなどを通して、人として生きていくのに必要なことを学んでいる幼稚園である。

また、子育てを肩代わりする「量としての子育て支援」ではなく、保護者が保護者として育ち「この子を育てていてよかった」と思えるような「質としての子育て支援」を目指している。

貴校の卒業生の活躍状況について：

- ① 平成 19 年と 27 年に、附小・附中の担任に卒園生の印象（基本的な生活習慣・人との関わり・学習への意欲・成績・言いたいことが言えている・自分で考えて行動できる）を ABC3～4 段階のどれかに○をつけてもらうという形で尋ねた。また平成 27 年に、卒園生の小学生にアンケートを実施した。卒園生の中学生に呼びかけ、来てくれた 12 名にインタビューを行った。
- ② 本園の研究紀要第 13 集（平成 28 年 2 月発行）にまとめた。
- ③ 学校が楽しく、基本的な習慣も身につけており、学習への意欲・言いたいことを言うことや自分で考えて行動することなどもある程度できている卒園生が多いことがわかった。成績には少し個人差があった。インタビューに来てくれた中学生たちは、「人に左右されずに自分の意見が持てる」「いじめに加担しないでいられる」「嫌なことがあった時に大切な人に嫌だとちゃんと言えたので、その後うまくいっている」など話してくれた。これから先も、困ったことがあっても周りの人に相談しながら何とかやっていけそうな中学生達の姿に安心した。

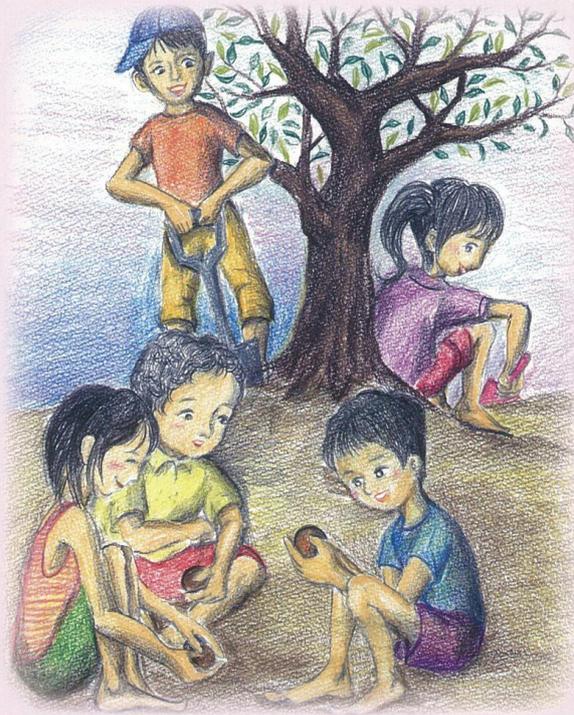
貴校勤務経験者の先生方が公立学校・教育委員会などへ戻られた後の活躍状況について：

- ① 追跡調査はしていない。幼少連携等で活躍されていると話は聞く。

魅力のある、特色のある、または、今後、公立学校へも展開できそうな先導的な取り組みなどについて：

・本園の遊びを写真やイラスト入りで紹介した「遊び集」を作った。教育要領の 5 領域の事項番号も入れ、教育要領との関係も考えた部分が好評である。800 部完売し、増刷した。

遊 び 集



佐賀大学文化教育学部
附属幼稚園

「遊び集」表紙

落ち葉・木の实・草でままごと

年少Ⅱ期～年長

砂と水と葉っぱ・木の实・草、これらを駆使して、砂場近辺で、毎日ごちそうが作られています。本当にウサギに食べさせるために、葉っぱや草を包丁で切ることもあります。

いつだったか、PTA活動でさつまいもの蒸しパンを作った時、子ども達のさつまいもを切る手つきや、粉をふるう手つき・粉と水を混ぜる手つきを見て、お母さん達が「さすが、砂場で鍛えてるからねえ」と感心していました。本当ですね。(庄籠)

健康 (1)(3)(4) 人間関係 (1)(2)(3)(4)(5)(6)(7)(12)
環境 (1)(2)(3)(4)(5)(7)(8) 言葉 (2)(3)(5)(8)
表現 (1)(2)(3)(4)(5)(7)



「遊び集」中身。

本園の遊びを 152、紹介している。写真の掲載については、全保護者に葉書を出して了承を得た。

・A4サイズの紙に、その学期のその子の遊びの写真数枚と、子どものせりふ・担任のコメントを載せた「ポートフォリオ」を一人一人に毎学期、担任が作成している。保護者に渡して、とても喜ばれている。また、3年保育の子は9枚、2年保育の子は6枚できるので、それを並べて小学校に「これが、この子の園での育ちです」と持って行き、引き継ぎを行っている。小学校の先生からは「顔と名前を一致させるのに、まず役に立つ」「好きな遊びがわかるので、そのことで話しかけることができる」「1年たって見て、この子は図工が好きだけど、幼稚園の時から物を作るのが好きだったんだ。やはり育ちは連続しているんだと実感した」などの感想が寄せられた。



地域において、現在、貴校はどのような存在であると考えますか：

佐賀県の幼児教育を引っ張っていく役目を果たしていると考えている。大学の教員免許状更新講習で幼児教育の話をしている。本園の公開保育研究会・研究発表会には、県内外からたくさんの参加者が集まる。副園長が、あちこちの保育者向け・保護者向け研修会の講師として呼ばれて話している。

附属学校の存在意義、貴校の存在意義について：

小学校からの人事交流の先生達（地域の公立・私立幼稚園の園長なども小学校の退職した校長が多い）に、保育を専門とするものとして、「保育」「幼児教育」を伝えている。

学部に幼少連携コースができ、附属幼稚園で学生に教育実習や保育参加をさせたいという学部の先生が、とても増えている。その学生に幼児教育と小学校以上の教育の違いを説明していると、引率してきた学部教員が「勉強になりました」と言ってくる。

このように、小学校以上の教育とは違う「保育」「幼児教育」を伝えるのが本園の存在意義であると考えている。それが幼少連携の第一歩でもあると考えている。